

「帰国」は甘い夢か苦い現実か？—在日タイ女性の引退と移動

Is Returning Home a Sweet Dream or Bitter Reality?:

Preparation for Retirement of Middle-aged Thai Female Migrants in Japan

新倉久乃 NIKURA, Hisano

フェリス女学院大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC2

Division of Humanities in Communication Studies, Ferris University, JSPS Research Fellow DC2

キーワード：越境家族の紐帯、送金、移動、長期にわたる離別

## 1、はじめに 研究の背景と先行研究および目的

在日タイ女性の多くは 1980 年代から日本に住まい、家族を形成してきた。そして 40-50 代となり子育てなどの役割を終え、引退後の生活を模索している。その模索の一つが、将来の生活の場を選択するために、母国タイと日本を往来することである。この年代の在日タイ女性の中には、越境家族の中での長期にわたる離別を経験しているものが少なくない。その理由としては、女性たちが、在留資格の取得、人身取引のルートによる入国、国際結婚の中での夫婦の不平等な関係による DV、離婚や生活困窮などから、脆弱な立場に置かれてきたということがある。長期にわたる離別は、個人的な問題に起因するのではなく、移住者をめぐる日本の制度の欠陥が、越境家族間の移動を阻み続けてきた結果生じたものである。

本報告では、日本人配偶者として入国、子育てをしながら日本に根付いた在日タイ女性のライフコースに注目するので、子育ての役割の終了を「引退」と捉える。また、「越境家族」は、女性がタイと日本に形成した家族で、それぞれの文化、言語を背景にもつ家族と定義する。これまでの研究では、「帰国神話」(Anwar, 1979) や「帰国への夢」(Gardener, 2002) が挙げられるが、在日タイ女性たちの現状を観察すると、帰国は神話や夢でない現実のものとなっていた。そこで本報告の目的は、40-50 代の在日タイ女性が長期にわたる離別を経た後に現在のタイへの移動を開始することと、これまで断続的に行った送金と、日タイの越境家族の紐帯の関係に着目し、現実化する引退後の帰国という決断に内在する社会的な課題を明らかにする。

## 2、研究の対象と調査方法

滞日 20 年以上で、日本で家族を形成した 40-50 代の在日タイ女性 3 人の協力を得て、日本とタイでのフィールドワーク、半構造化インタビューと参与観察を行った。期間は 2016 年 10 月から 2019 年 8 月まで。

## 3、事例および考察

### 1) ライフコースにおける「引退」と国際移動の関連

在日タイ女性は、ライフコースの中で子育て役割の終了など引退の時期を迎えている。それと同時に母国タイの経済成長と、グローバル化の結果として起きた国内外の航空運賃の低価格化によって、母国訪問のための条件が整う時代となった。2010 年前後には、顔の見える安価な通信手段が出現し、双方の日常の出来事が即時に伝わることで、より一層訪問を促す要因となっている。

### 2) 帰国の決断を促進させるもの

帰国を検討する理由として、第一に、経済面から日本での低賃金労働や生活保護の拘束の多い生活より、生活費の負担の少ないタイの暮らしを選択する。たとえ、これまでの親への送金が、タイで自らの老後のために十分な貯金、住宅などの形になっていなくても、タイなら自分一人分の生活費は何とかなると考えている。ひとり親の女性は、自分がタイで自立することで、日本の子どもへの将来の負担を軽減したいと述べている。

第二に、日本で子育て役割は引退しても、40-50代は新たにタイの家族の中での役割、娘役割として、タイの実父母の介護の必要が生じる時期であり、そのために帰国を希望する。母国タイでは、高齢者の人口が増え、近年の経済発展を背景に高齢者福祉制度が整い始めた。日本と比較すればわずかであるが、父母が高齢者手当を受給できることは、娘役割を果たすための援助になるだろう。

最後に、日本人夫の定年後の海外移住<sup>1</sup>の希望と在日タイ女性の引退のタイミングが合うことによって帰国が実現する。このような場合、近い将来の本帰国のため新居や店舗の建設のために、女性は度々タイを訪問してその準備を行っていた。

#### 4. まとめ・・・長期の離別と越境家族の紐帯

タイの家族は、概して彼女たちの日本でのこれまでの困難な生活について共感的ではない<sup>2</sup>。特に、家族の中に日本での生活を共感的に語りあうことができる海外労働や国際結婚の経験者がいない場合、帰国した女性は孤独であり、タイの家族の期待、羨望、経済的依存に苦悩する。そのような環境の中で女性の「引退」による帰国は、タイの家族との間で葛藤しながら新しい紐帯を作り直す日々の実践である。女性たちのこれまでの送金は「家族のため」という規範<sup>3</sup>に沿うもので、送金の受け手の親（多くは母親）に住居を提供することを期待している。しかし、長期にわたり帰国することがなかったため、親がどのように仕送りを分配したか、その結果を知るのは帰国後になる。親の住居があれば、そこが自分の帰国後の生活基盤となるのだが、親が親自身の住居より女性のきょうだいの生活支援を優先して分配していることもある。そのような場合、女性たちは、日本での経済的困窮の中からも親に仕送ってきた犠牲が報われないという失望を味わう。さらに、「豊かな」日本から帰国した女性に対して、タイの家族が過度に期待や依存することもある。特に日本人夫を帯同した帰国の場合、タイの家族が日本人夫の経済力への依存を増長させて、女性と日本人夫の関係性を悪化させるかもしれない。本報告では、引退による帰国という移住女性の新しいライフコースの選択を考察することによって、長期にわたる離別の現状を明らかにする。そこから、越境家族間の移動を阻み続けてきた移住者をめぐる日本の制度の欠陥について、問題提起を行いたい。

#### 【参考文献】

- 江藤双恵 (1996) 「ジェンダーと家計貢献」『ジェンダーから世界を読む』関啓子・木本貴美子編 明石書店、148-173 頁
- 佐竹眞明・メアリー・アンジェリン・ダアノイ (2008) 「フィリピンー日本国際結婚 移住と多文化共生」めこん、125-127 頁
- Anwar, Muhammad (1979) *The Myth of Return: Pakistanis in Britain*. Heinemann Educational Books Ltd.
- Gardner, Katy (2002) *Age, Narrative and Migration: The Life Course and Life Histories of Bengali Elders in London*. Berg publishers.
- Thai, Hung Cam. (2014). *Insufficient Funds: The Culture of Money in Low-Wage Transnational Families*. Stanford University Press.

<sup>1</sup> 在日タイ女性と同時期、来日数の多かったフィリピン女性の研究で、佐竹はフィリピン女性と国際結婚した日本人男性に対して、定年後にフィリピンに移動するかどうかインタビューを行っている（佐竹、2008、125-126 頁）。

<sup>2</sup> Thai は、在米ベトナム難民と母国の家族の間の送金や経済援助の調査をし、母国の家族が、渡米した家族の生活の苦労話を聞きたくないという語りから、越境家族の間の共感の難しさを述べている（Thai、2014、pp.41-42）。

<sup>3</sup> 江藤は、タイ女性の家計貢献について、娘が外に出て働くのは、家族に貢献したいという気持ちからであると述べている（江藤、1996、168 頁）。